



延享年中、此風ハヤル、タアチナクシテ、横ニピンチ開カセ、マゲメ
チイサク、百會イタキヘ上テ結、エリノヨゴレザルチ第一トス、

〔獨語〕つくづくと百年この方の風俗を思ひくらぶるに、餘所のことをばおいて、江戸の人の風俗こそ殊に昔にかはりたれ、中略寛永の比迄は、婦女細き麻繩にて髪を束ねて、其の上を黒き絹にて巻きしに、其の後麻繩をやめて紙にてゆふ、越前國より粉紙にて、元結紙と云ふものを造り出だし、海内の婦女みな是を用ふ、夫より絹にて巻く事もやみぬと、我が父正しく是を見て語り聞かせり、今の人聞きては信とせず、凡男女の髪かたち、我等が見及びてよりこの方も、幾かはりかし、つらん、今は昔のかたものこらず、昔の婦人は、髪多く長きをたけにあまるなど云ひて譽めしに、近比は髪少く短きをよしとする風俗になりて、髪多き女は、髻の内を、或はきり、或は剃りて少くする、此の風俗は京の婦女より移り來れり、此のことに限らず、都べて男女の風俗、詞づかひ、物の名まで、近比は京に似たること多し。

〔賤のをだ巻〕一男女の髪も、其頃はさまぐに替りたり、中略女も昔勝山といふわけ流行たり、遊女の勝山と云が結ひ始めたりといへり、其後丁子茶の流行る比は、灯籠鬢とて、兩様の鬢を見事に毛筋をすかして、とうろうの如くに結びたり、ゆへにびんさしといふもの流行出て、小間もの屋など多く持來りたり、又男のひたいも小額を置て際を付ず、上計り額をすこし角を入ぬきたるが、温和にて、若きものは甚見付もよろしきゆへ、流行出たり、其弊、額より鬢を厚くして、ひたい